

# アジア神学の可能性と方法

——森本あんり著『アジア神学講義』を読んで——

芦名 定道

## 一 「アジア神学」とはいかなる問いか

本書の目的は、表題にあるように、「アジア神学」(II)「アジア的な文化背景を自覚的な文脈としたキリスト教神学」一頁。以下引用頁は頁数のみを記す)を明確な仕方でもテーマ化することであり、著者は、まず日本における「アジア神学」の現状と意義について説明することから論を始めている。その指摘によれば、「日本では、ヨーロッパやアメリカの神学は相変らず紹介も研究もされているが、アジアの神学はその大部分が邦訳すら存在しない状態である」(一)。この神学における「欧米捕囚」の状況は、キリスト教思想に限らず、日本の思想界全般に認められる問題であって、こうした現状の中でアジア神学を取り上げるのは、アジア神学は「実は神学にとって無視することができない根本的な問いを含んで」おり、「アジアの神学は、その異化作用によって、われわれがふだん気づかずに持っているいくつもの基本的な前提の所在を自覚させ、これを問い直す力をもっている」(三三)からに他ならない。つまり、欧米捕囚に陥っている日本のキリスト教神学がこの自らの状況を自覚化し相対化するために「アジア神学」は重要な手がかりを与えてくれる。これが、アジア神学を論じる意義なのである。

本書はこうした問題意識に基づいてアジア神学を主題的に取り上げるわけであるが、ア

### 【創文】

470号/二〇〇四・一一

●文化の風景 249

生計、家計、死計

木村尚三郎

―「三井商売記」―

◆特集・アジア神学講義

アジア神学の可能性と方法

―森本あんり著『アジア神学講義』を読んで―

芦名 定道

これは新しい神学なのか、

それとも：

片山 寛 6

比較思想の視点から見た

寄留者神学

小泉 仰 9

●日本漢詩人紀行 2

蘇峰の碑

林田慎之助 12

インドネシア都市中間層に

とつてのイスラーム

見市 建 16

●書評

超越に満たされた人間

矢内 義顕 21

―リーゼンフーバー著『超越に  
貫かれた人間』を読んで―

出版案内

〔表紙〕串田光弘・曾我部ひとみ

アジア神学を構想する上で問われるべき問いを明らかにして論を進めている点にこそ、本書が日本のキリスト教思想研究に対してなした最大の貢献を認めることができるであろう。何を問うべきかを明らかにし、それを明確に定式化することは、「道案内も少なく、多くが問われたばかりの未熟な若い問い」（二二三）を扱う上で、重要なポイントだからである。序章の「3 授業風景から」——本書は、プリンストン神学校での著者の講義に基づいている——に示されているように、著者は次のような周到に準備された問題設定から議論に着手している。

三つの具体的な目的を挙げた。

- 1 多様なアジア神学の豊かさと深さに接すること
- 2 そこで神学にとって本質的なくつかの問いが発せられているのを見ること
- 3 自己自身の神学的文脈を特定してこれに反省を加え、自分の神学構築の出発点となすこと

（二四）

したがって、本書はこれらの課題がいかに遂行されたのかという点から評価できるのである。

以下この書評では、本書に含まれる多面的な問題連関の内、アジア神学の可能性に関わる事柄に論点をしばって議論を行いたい。本書はその四つの章からなる本論において、四人の神学者の思想を精密かつ批判的に分析しているが——この分析において著者は優れた力量を示しており、このテーマに関する日本の第一人者と言える——、これらの論評については、他の書評者にお任せし、ここでは

教神学全般にとって決定的な意味を有しているのである。

しかし、文脈化に関しては文脈化の具体的形態の適切性が問われねばならない。それを論じるには、状況Ⅱ文脈化と相関するもう一つの極、つまりメッセージに議論を移す必要がある。ここで著者が取り上げるのは「伝統」概念である。文脈化を行う際に、キリスト教神学は、伝統との連続性を保持することが必要になる。なぜなら、「こうした過去との連続性を何らかの接点において確保する努力なしには、それがキリスト教の一部であるという保証もなくなってしまう」（二二六）からである。伝統こそが、「個人と共同体にアイ

主に議論の視点あるいは方法論に関わる序章と結章を取り扱うことにする。

## 二 「アジア神学」を問う枠組みあるいは方法論

著者は、アジア神学を論じる際に、「状況とメッセージ」の相関構造という枠組みを用いている。これは、「神学は常にメッセージと状況という二つの極からの張力を受けつつ営まれる」（一九）の言い方からもわかるように、アジア神学に限らず、キリスト教思想一般の枠組みと言える——この枠組みは現代神学で広く受け入れられている——。以下、状況とメッセージに分けて、著者の説明を手がかりにこの神学的思惟構造を検討してみよう。

まず、状況の極であるが、これは、本書では「文脈化」として論じられる。神学は、神学者が立つ特定の文脈において構築されるのであり、それゆえアジア神学とは、「アジア」という文脈において構築された神学ということになる。しかし、文脈化とはアジア神学特有のものではなく、「欧米のこれまでの神学は、実は自己の文脈的出自を自覚しないでいるにすぎない」、「文脈化」は、「すでに自己自身のキリスト教理解において起こっている事実なのである」（七）。これは重要な指摘であり、ここから「純粹なキリスト教」というものはどこにも存在しない（七）、「啓示は常に文脈の中で生起する」（八）ことが確認されるのである。アジア神学を論じることは、キリスト教神学にとって、自らを規定する解釈学的構造を意識化する手がかりとなり得るのであって、アジア神学はキリスト

デンティティの源泉を提供する」（二七七）ものであって、メッセージはこの伝統によって媒介されるのである。

以上より、アジア神学（神学一般もまた）とは、文脈化と伝統という二つの要素から構成されることが判明するが、神学にとって重要なことは、文脈化と伝統の二つの契機が適切な仕方と統合（相関）されていることなのである。「伝統は共同体に結合力と持続力を与え、その歴史的連続性を保証するが、まさにそうであるために、伝統は常に新しいものに対して開かれていなければならない」（二八）、「アジアの神学は、それ自身が狭義の伝統への挑戦でありつつ、同時に広義の全体教会がもつ伝統の自己変革機能の一部を担っている」（三〇）。本書の本論から一例を挙げるならば、アンドリュ・バクに関する、「伝統的な原罪論が語らうとしてきた内容の真理を、恨の理解によって新たに表現し直そうとしているのである」（五四）との議論において、「伝統的な原罪論が語らうとしてきた内容の真理」は「伝統」の極に、「新たに表現し直す」は「文脈化」の極に相当していると言えよう。

## 三 そもそも「アジア」「アジア人」とは

次に、「アジア神学」を論じる前提である「アジア」理解について見てみよう。まず、著者はこの点について、「中国漢字文化圏」（二五）、「中国」「韓国」「日本という三つの国からなる東アジア文化圏」（二四五）に範囲を限定した上で、アジアの多様性を指摘する。「アジアの神学」といっても、「国や地域によってその状況はさま

森本あんり

## アジア神学講義

——グローバル化するコンテクストの神学——

### 序章

第1章 アンドルー・バク「罪の補完概念としての『恨』」

第2章 C・S・ルン「『広報の神』へのアジア的批判」

第3章 小山晃佑「対立と受容の背面構造」

第4章 ジュン・ユン・リー「文脈化のもたらす新たな相克」

### 結章

菊判・二四四頁・三八〇〇円

ざまである。アジアの諸国・諸地域・諸文化は、『アジア』という簡単な括り方を拒絶する多様性をもっている」(一一一)。しかも、この多様なアジアは歴史の変動の中にある。こうした点を総合して考えるならば、アジア神学の文脈であるアジアについて、次のような重層構造を考慮しなければならないことがわかる。『文脈化』の努力をより注意深く検討するならば、その対象はいずれにあっても決して一枚岩ではない。韓国の宗教文化だけを取り上げて、その基底には道教、儒教、仏教、シャーマニズムなどが相互に絡み合い影響を与えつつ流れている」(一一五)。

以上のアジア理解は、さらに『アジア』とは、最終的には地理的な概念であるよりは歴史的概念である」(一一二)として展開されることになるが、ここで書評者の私見を述べるならば、アジアを歴史的概念と考えることから帰結するのは、アジア神学の内容を論じる際に欧米列強の圧力下におけるアジアの近代化という事態に留意しなければならないということである。「貧困と抑圧と搾取という不正義の現実を目の前にしている第三世界の神学者たち」(一四五)という視点は、多様に変化しつつある歴史のアジアを論じる上で不可欠の視点なのである。

アジア神学に関して、次に論じるべきことは、神学の主体と聞き手(リアジアン神学において誰が誰に語るのか)の問題、つまり「アジアにおける神学」の起源、由来となる「アジア人」とは誰か(一三九)という問いである。たとえば、ジュン・ユン・リーについて、彼は『アジア系アメリカ人』という自己認識を明確にしており、その著作も『欧米の読者』を対象に書かれている」(一四二)と言われるが、そうであるならば、リーの神学は問われるべきアジア神学の中で「体いかなる位置を占めているのかが問われねばならないであろう。私見を述べれば、おそらく、本書で扱われるアジア出身で主に欧米で活躍してきた四人の神学者たちが英語で書いた神学思想は、アジア神学の「形態、一部分であって、アジア神学とは、アジア出身の神学者が母国で母国の読者に対して書いた神学や、あるいは欧米生まれの神学者がアジアにおいてアジアの言語でアジアの読者に対して書いた神学をも含むものと考えられねばならないのではないだろうか。アジア神学のアジア性は形式的にだけでなく、むしろ文脈化の内実(アジアの固有性?)から判断されねばならないのである。その場合、日本人神学者が日本語で書いた神学も、内容次第では十分にアジア神学と評しうることになるであろう。

#### 四 コメント

最後に若干の批判的コメントを行うことによって、この書評を閉じたい。

本書を通読した最初の印象は、充実した序章に比べて結章がもの足りないというものであった。それは、本書が意図的に(一)、問題提起することに力点をおいており、それに回答を与えることは必ずしも第一義的には目指していない、ということなのかもしれない。たとえば、結章で、著者はアジア神学を整理するためビーヴァーであったのではないか(大木英夫著『組織神学序説』教文館、を参照)。本論で扱われる四人の神学者は、この「なぜ」の問いとの関わりで何を語っているのだろうか。

このようなコメントをした上で、最後にわれわれが留意すべきは、本書によって、アジア神学への一つの明確な切り口が示され、問われるべき問いが提示されたからには、この出発点からさらに議論を前へ進めて行くことこそが、われわれに問われているということである。アジア神学の可能性について、今後さらなる議論の展開がなされることを期待しつつ、筆を置きたい。

(あしな・さだみち 京都大学大学院文学研究科助教授/キリスト教学)

本書の内容については、個々の記述に関して、疑問な点も少なくない——たとえば、序章三二頁以下の「正統」概念を論じる意味や、結章で扱われる「二重信仰」の議論など——。しかし、個別の

な論点に先だつて問われるべきは、「なぜ」に関わる問いである。著者は、序章の「1 なぜ『アジアの神学』か」で、日本の神学が翻訳神学を越えるために、「アジアの神学」に眼を向けることの必要性を説いた。しかし、真に「アジア神学」を問うためには、何よりもアジアの視点から、「なぜ、アジア(先に述べた歴史性を有する)においてキリスト教なのか、なぜ、神学なのか」を問う必要が

声名定道 A5判・三八〇頁・七五〇〇円

テイリツヒと弁証神学の挑戦

森本あんり A5判・三五〇頁・八五〇〇円

ジヨナサン・エドワーズ研究

アメリカ・ピューリタニズムの存在論と救済論

## これは新しい神学なのか、それとも…

—三位一体論研究の視点から—

片山 寛

欧米の大学に留学したことのある神学研究者が、おそらく一度ならず経験したことがあるに違いないひとつの小さな齟齬がある。それは、向こうの人々が私たちに期待しているものが、一般的に私たち自身の思いとはズレがあるということである。それまで日本で行ってきた研究成果を「本場」の人々に問い、その上で形あるものにとまとめようと張り切っている私たちに対して、欧米の人々は一応注意深く聞き入ってくれはするものの、明らかに多少失望した様子で次のように聞き返すことがあるのである。「あなたのおっしゃることとはよくわかるし、そのとおりだと思う。しかし日本のあなたがたからは、何か別の意見を聞きたいのだが」。つまり彼らが私たちが聞きたいと望んでいるのは、欧米の（すなわち自分たちの）神学のコピーではなく、私たちがアジアの、あるいは日本の歴史的状况や思想的伝統の中で思考し、その立場から私たちがキリスト教とその思想をどのように理解し位置づけるかということなのである。

私たちは現にアジア人であり日本人であるのだから、特別に意識

しなくとも、すでにアジアと日本の状況と伝統の中で思考しているはずではないか、だから自分がこうして語っているその中に、とりもなおさず現代の日本の思想的状況が反映しているのだ、と反論してみることもできよう。あなたが期待しているようなエキゾチックな異国としての日本は、今も昔も存在してはいない。それはあなたが作り上げた幻ではないのか、と言ってみたいような気もする。しかし多くの場合、(言葉の問題もあるが) 私たちは押し黙り、目を伏せて、自分の中に本当にあるのかどうかわからない「アジア的なもの」「日本的なるもの」を探し求め始めるのである。

このような出来事の中に、すでに何ほどか、彼我の残念な力関係が反映しているのである。アジアや日本の思想的伝統から遠ざかり、ただ欧米を神学の「本場」だと考えて勉強にやってきた自分のナイーヴさが反省される。自分たちの「独自の」伝統を見直し、それに回帰し、その立場からもう一度語るなら、彼らとあるいは対等に語り合えるのではないだろうか。そして実際かなり多くの

留学生たちが、彼らの要求に答えて、アジアあるいは日本の状況を

神学なのであろうか」(二〇五頁)。

主題にして、そこでの神学的課題を論文にするのである。そのこと自体は別におかしなことではない。欧米の人々を讀者として想定した論文が、その人々の聞きたいと欲していることがらについて書くのはいわば当然でもある。ただひとつ残念なのは、最初に私たちが発見したと信じたあの事柄、そこそが中心的で普遍的な問題だと考えて、それをたずさえて留学していったところの問題は、彼らの関心を引かなかったということである。…

この書における「アジア神学」とは、アジア(特に東アジア)の文脈(コンテクスト)における神学のことである。神学という学問が、他の人文系の学問と同様、それを受容する人々の固有の歴史や文化の文脈と切り離せないということ、そして好むと好まざるとにかかわらず、私たちは自分自身の文脈において聖書や神学の言葉を理解しているということは疑えない。「文脈化神学」とは、そのようなそれぞれの「文脈」を明らかにし、その立場から逆に、西欧の神学が前提にしているはずの文脈、あるいはブルトマン流に言う

『アジア神学講義』というこの書物を読んで、深く考えさせられたのは、以上のような状況である。そしてそれは、もう五〇年以上

「前理解」を、逆照射し相対化しようとする試みであるようだ。

前からあまり変わっていないようにも思う。この書物には、そのような状況の中で、ある意味でそれを突破して「アジア神学」を語り、欧米の研究者にも受容されたと思われる四人のアジア出身の神学者たちの論文が紹介されている。それらは確かに非常に面白い。私は近頃こんなに面白い議論を日本語で読んだ覚えがないほどである。けれどもここにはひとつ大きな問題が未解決のまま残っているように思われる。その問題は、著者の森本あんり氏自身も意識されており、四人の神学者の神学を紹介したそれぞれの章の末尾に、「結」と題して指摘しておられる。それは結局、これらの神学の「アジア性」とは何なのか、という問いである。すなわち彼らが「ともに、その著書を欧米で出版し、母語でない言語で執筆し議論せざるを得ないとすれば、『アジアの神学』とはいったい誰に向けて誰が語る

そのような試みが確かに成立すること、そして場合によって非常に実り豊かなものになりうるということ、私は疑われない。比較文化の視点からも、社会批判の視点からも、あるいは宣教論や信仰論の視点からもそれは興味深いものであろう。ただ問題なのは、それが「神学」なのか、ということである。神学はたとえその語る言葉のほとんどが文化多元主義的に解釈されようとしても、その中心には、普遍実在論的な核がなくはならないのではないだろうか。そのような核なしには、神学は結局——この書で紹介されている「アジア神学」に私はその危険を嗅ぎつけるのであるが——広い意味での心理学に解消されてしまうのではないだろうか。それではこの現代という時代に神学が存在しつづけているという、それ自体奇跡のような事実が、意味を失ってしまうのではないだろうか。

以上の危険は、「アジア神学」がたとえば三位一体論のような、キリスト教神学の構造的な中心とされてきたことがらを扱うときに、頂点に達する。森本氏が四人のアジア神学者の最後に、ジョン・ユン・リーの『アジア的視点からの三位一体論』をとりあげているのは、その意味では巧みな構成である。リーはアジア的な陰陽思想を拡張し捉えなおすことによって、男性原理(父)と女性原理(聖霊)と両者から生まれるもの(子、あるいは人々)に一種の動的な三位一体構造を見出す。そしてこの「アジア的な三位一体論」によって、従来の「西欧的な」三位一体論を批判しているのである。リーのこのそれ自体は興味深い思考実験と、そこから帰結する様々な結論に対する批判は、森本氏が本書で実行していることなので、ここでは扱わない。ただ私が指摘しておきたいのは、こうした手続きで描き出された「アジア的三位一体論」なるものは、本来の三位一体論とはほとんど何の関係もないものではないか、ということである。

三位一体論は、一世紀から四世紀の教会の歴史の中で、キリスト教の伝統的な信仰の内容をできる限り正確に言い表そうとする努力の中で生み出された教理であり信仰告白である。キリスト教の信仰の原点はイエス・キリストへの信仰にあるということ、そしてその信仰は唯一の神への信仰でもあるということ。この初代教会から受け継がれた信仰のあり方を、その中に含まれる通常の理性にとつての矛盾を含めただままで言い表したものが、それが三位一体論に他ならぬ。

◆◆◆〈特集・アジア神学講義〉◆◆◆

## 比較思想の視点から見た寄留者神学

——森本あんり著『アジア神学講義』をめぐって——

最近の書籍の中で、本書ほど興味深く刺激的な本はあまりない。またこれほど容易には読み進められない本も少ない。なぜなら、本書は各頁毎に関心をそそる問題提起が重なり、私が心で質疑を繰り返す内に時間だけが経っていくからである。そこで、多くの関心事を残しながら、次の幾つかの点に絞って、私の疑問を提出するに留めたい。

第一に「アジア神学」という場合のアジアの概念である。著者はアジアを東アジアと限定しているが、取り上げたアジア神学者は、東アジアに生まれ育ってはいるが、神学者として成長したのは、アメリカその他の外国である。韓国出身のアンドルー・パークも台湾出身のC・S・ソーンも英米で活躍しているし、小山晃佑もアメリカで神学者として成長し、東南アジアやアメリカで活躍を続けてきた。また北朝鮮生まれで唯一故人のジョン・ユン・リーは、アメリカで大成した神学者である。彼らは、故国よりは外国に寄留して伝統的神学に挑戦した寄留者の神学者と言うべきであり、アジア神学者と言えるかどうか疑わしい。

ない。もちろんそこには、その時代に生きた人々の歴史的・文化的「文脈」が含まれていた。誰しも自分の影を飛び越せないように、自分の文脈を飛び越えて語ることはできないのだから。しかしそれらの「文脈」が「三位一体論」の中心ではない。もしそうであったなら、三位一体論は、リーの「アジア的三位一体論」がそうであるように、神存在に関する抽象的思弁を超えることはなかったであろう。

もし「アジア神学」というものが成立するとすれば、それはこの書に紹介されている、欧米の読者に語りかける「神学者」の文脈においてではなく、アジアにおける教会がどのように自分たちの公同の信仰を告白するか、という文脈の中でのみ生み出されるものではないだろうか。

(かたやま・ひろし 西南学院大学神学部教授/教理史・中世哲学)

片山 寛  
A5判・二三〇頁・四五〇〇円  
トマス・アクイナスの三位一体論研究

小泉 仰

ところで、寄留者という立場は、極めて貴重な視点である。R・ベネディクトは他文化に属する者が別の文化を見るとき、その別の文化とは色違いの眼鏡を掛けているから、その文化の特色を見やすいと言ったが、至言である。上記四人の寄留者の神学者は、よそ者としての別個の色眼鏡を掛けて、寄留先の伝統神学に挑戦すると共に、自国からも離れた視点にも立っている。彼らはいわば自国文化に対してさえ寄留者であり、別色の眼鏡で改めて自国の神学を見直している。こうした寄留者の視点に立つことで、彼らは新しい神学的問い直しを行った。それゆえ、私は、彼らの神学を「アジア神学」と呼ぶよりは、むしろ「寄留者の神学」と呼ぶ方が適切であると考ええる。

第二に、私は、日本の神学が「欧米捕囚」に過ぎないと言われる点について一言述べたい。私が多少親炙している領域に移して考えてみよう。日本の哲学も、嘗て海外の学者から欧米哲学の紹介に汲々としていると言われた。しかし日本最初の哲学者西周は、一二〇年前の著書『人三宝説』で、二〇世紀英米の倫理学者もいまだ

提案していない独創的で無矛盾の功利主義倫理学体系を提出した。

最近では欧米の学者にも、西周以後の多くの日本の哲学者の思想とその独自性を理解し研究する人々が増えている。日本哲学は欧米の紹介に過ぎないといった批判はもはや存在しない。上記の日本哲学についての知見が一般化してきているのと同様に、日本で神学的営為を続けている神学者たち（私は神学校卒業者だけを神学者だとすることに疑いを持っている）も、欧米の神学者たちに匹敵する神学的営為を行っているかもしれない。残念ながら私の管見では、そうした事情を伺い知ることができない。唯日本の独創的な神学的営為が殆ど外国語によって発表されていない故に、欧米に知られていないだけではないだろうか。北森嘉造の神学は、僅かに外国語に翻訳されるという希有の幸運に恵まれて欧米に知られているが、北森以外にも未だ知られていない神学者がいるのではないか。「欧米捕囚」といった批判も、いずれ解消されるであろう。筆者の願いは、未知の日本の神学者の発掘を日本の研究者に行なって欲しいことである。

第三は、日本の一般信徒に対しての寄留者神学の貢献を見ることである。日本の信徒に対して第一に大きな信仰的課題を突きつけているのは、バクの展開した「恨」である。伝統的神学は、イエス・キリストの十字架の贖罪を通して悔い改めに導かれて救いに与る罪人は、自分だけの救いを達成してすべて事足りりとしているが、罪人の犯罪による犠牲者の恨を全く置き去りにした点で、欠落があると言われる。イエス・キリストの贖罪という神と人との垂直的救いと共に、恨を持つ人々の赦しと犠牲者に対する罪人の贖罪の参加と

キリストを完全に否定する点である。私は、復活のキリストを失ったキリスト教「信仰」は、もはやキリスト教を逸脱していると思ふ。

第五は、小山晃佑の文脈化神学の問題である。彼はシナイ山と富士山を対比し、前者が自然を超越して歴史に介入する神及び超越論的終末論的神学を表すとし、後者が内在神を象徴し、神と人間とは連続性を保つものとし、死を運命として諦念する宇宙論的神学を表すものとする。こうした比喩を通して、両者の問題点を超克するために、両方の神学を調停する十字架の神学を改めて提唱する。十字架の神学では、キリストは、自分を救えないキリストであり、自己否定と自己卑下のキリストであると言う。こうしてシナイ山型宗教の熱情を否定するとともに、シナイ山型宗教を富士山型宗教の無差別・無媒介的な包み込みの宗教性によって調和する文脈化神学を提唱して、興味深い示唆を与えている。

他方、彼の問題は、シナイ山と富士山の対比のみを通して文脈化神学の建設を志す姿勢にある。明治初期にキリスト教が宣教されたとき、最初にキリスト教を信仰し宣教に挺身した人々は、富士山型宗教の人々ではない。熊本バンド、札幌バンド、横浜バンドのキリスト者であり、儒学的教養を培っていた武士出身者であった。従って、日本特有の文脈化神学を建設するために、最も相応しい対比モデルは、キリスト教と日本儒学という対比ではないか。さらに武士道とキリスト教、浄土系仏教とキリスト教の対比を通して、文脈化神学を構築することも可能であろう。小山はアジアの重層的な宗教

という水平次元の和解があつて初めて、贖罪が成就すると主張される。イエス・キリストの贖罪による罪の赦しだけを説く伝統的神学の欠陥を、恨概念によって補完すべきだというバクの神学は、誠に説得的である。こうした赦しと罪人の側の積極的な罪の償いとが信仰的世界にとって大きな改悛を迫る重大な論点である。

一方、恨は人間と人間との水平次元の問題である。罪人の罪を犠牲者の赦しと罪人の贖罪行為を要求するとして、恨はなぜ対象集団の中の無実の部分にも及ぶのか。また罪人が与えた犠牲者の犠牲に対する恨なら、なぜ罪人の次世代、三世代の無実の人々に対する恨を含むのか。一方、犠牲者の恨は逆に罪人の恨を呼び起こす可能性もあろう。罪人の恨は逆恨みとして放置してよいのか。この問題への補完理論を必要とするのではないか。犠牲者の恨はどこにその適用範囲を限定すべきかが問題である。

第四に、C・S・ソンは、第三の目の神学を要請している。私は、第三の目をアジアの目に限定して良いかどうかを問いたい。寄留者の神学者は、在留する外国でも寄留者であり、同時に彼らの故国でも一種の寄留者である。従って、私は彼らの神学を寄留者の神学と呼ぶことを提案した。そこで、もし欧米に生まれた神学者がアジアで長年生活しながら神学活動をするなら、上記の四人の寄留の神学者と同じ資格を持つことになり、欧米の伝統的神学に対して補完を迫る神学を提案することも可能である。そこで、第三の目とは寄留者の目と言うことができないであろうか。またソン神学最大の問題は、キリスト教宣教の覇権主義としてパウロ神学による復活の

性の一面のみを削り取って対比し、そこから文脈化神学を性急に建設しようとしていると批判されても仕方あるまい。

第六には、ジュン・ユン・リーの陰陽論による三位一体論の再解釈についてである。著者森本氏が指摘したリーの神学に対する批判には、私も同意するが、一つだけ付加して置こう。リーは彼の生にあって有意義な象徴として、たとえば「ルーアッハ（霊）」を「氣」と置き換えている。聖書の中の「霊」は歴史と共に意義を無際限に変化させてきているし、朱子学の「氣」もまた中国や日本の儒学史の中で変転極まりない変質を重ねて来ている。そこでどの意味の霊をどの意味の氣に対応させているのかについて、リーは全く明瞭ではなく、主観的に対応させているだけである。リーの文脈化神学はすべてこうした無規定的な概念の対応に終始しているかのように見える。この点を明確にしない限り、リーの文脈化神学は、彼の独善神学に終わるのではないかと疑われる。

最後に最終章で著者が行った文脈化神学の類型化は極めて示唆深く、文脈化神学全体を理解させるのに大いに有用であり、さらには日本人としてのキリスト教徒がどの類型に属しているかを自己反省的に了解することにも役立つことを指摘して、この書評を終わらう。